



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

現代日本語諸方言における連声規則の記述とそのデータベース化

研究代表者	黒木 邦彦
研究代表者別名	KUROKI Kunihiro
報告年度	2019-06-29
研究課題番号	16K13227
URL	http://id.nii.ac.jp/1044/00002137/

令和 元 年 6 月 29 日現在

機関番号：34513

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13227

研究課題名（和文）現代日本語諸方言における連声規則の記述とそのデータベース化

研究課題名（英文）Description and Databasing of Sandhi Rules in Modern Japanese Dialects

研究代表者

黒木 邦彦（Kuroki, Kunihiko）

神戸松蔭女子学院大学・文学部・准教授

研究者番号：80613380

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000 円

研究成果の概要（和文）：現代日本語諸変種に頻出する音便とその生起条件とを整理したデータベース（以下「音便DB」）を作成した。この音便DBは、アニメや映画をきっかけに日本語学習を始める学習者の使用も想定している。「すげー（凄い）」「くっから（来るから）」のような音便は、非規範的な日本語とされ、従来の日本語教育ではあまり扱われることがなかった。そのため、学習者がこのような音便を含む台詞を理解しようとしても、自分自身で調べる手立てがない。そこで、音便DBは、一般的な国語辞典に拠れば、検索語の構成要素を掴みうる構成とした。将来的には、学習者がweb上で気軽に検索できる形式での公開を目指している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で作成した音便DBは、アニメや映画をきっかけに日本語学習を始める学習者の使用も想定している。「すげー（凄い）」「くっから（来るから）」のような音便は、非規範的な日本語とされ、従来の日本語教育ではあまり扱われることがなかった。そのため、学習者がこのような音便を含む台詞を理解しようとしても、自分自身で調べる手立てがない。そこで、音便DBは、一般的な国語辞典に拠れば、検索語の構成要素を掴みうる構成とした。同時に、検索精度向上と自立学習支援とを狙って、音便の音韻的・形態的条件も入力している。

研究成果の概要（英文）：We made “the Japanese Sandhi Database” (hereafter “the Sandhi DB”), which contains many examples and the conditions of sandhi often used in Modern Japanese dialects. The Sandhi DB intends to help L2 learners of Japanese who start studying Japanese through comics, animation, and movies. Sandhi forms, such as *sugee hiyaQto suQkara* ‘because it’s really chilly’, are regarded as non-standard Japanese and hence are hardly covered in conventional Japanese L2 education. When learners cannot understand dialogue with the sandhi forms cited above, there is no way to consult a dictionary for *sugee* (*sugoi* ‘very’) and *suQkara* (*surukara* ‘because I will do so’). For this reason, the Sandhi DB consists of data to assist users in understanding the constituents of search words according to common Japanese dictionaries. We aim to make the Sandhi DB available in a format which L2 learners can easily access its content and search for Japanese sandhi forms on the web.

研究分野：言語学

キーワード：音韻論 形態音韻論 連声 音便 日本語諸変種 自然音類 日本語教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19（共通）

1．研究開始当初の背景

現代日本語諸方言（以下「諸方言」）の連声は、国立国語研究所（編）『日本言語地図』『方言文法全国地図』から窺い知れる。しかし、どちらも包括的・体系的ではなく、基礎研究の水準に達しているとは言い難い。また、連声規則の記述は、文献 [a-e] などで単発的に行なわれているに過ぎなかった。

2．研究の目的

諸方言の連声規則の記述は、文献 [a-e] などで単発的に行なわれているに過ぎない。そこで、日本語における音素体系の変遷を解明する仕事の一環として、諸方言の連声規則を調査・記述し、日本語歴史音韻論に資する日本語連声データベースを作成する。連声はそれに関与する音素の素性を強く反映するので、連声研究の成果は日本語歴史音韻論の進展に貢献すると考えられる。

本土方言を中心とするこれまでの日本語方言研究は、諸方言の特徴的な言語現象を見定めて、標準語との違いを集中的に研究するという方策のもと進められてきた。そのためか、日本語音韻論・形態論の基礎研究は、アクセントや動詞の活用に関するものを除けば、21世紀に入ってもなお貧弱である。また、William Jones が 1786 年にサンスクリット語と欧州諸語の類似性を指摘して以来、印欧語歴史比較言語学が多方面に亘って研究成果を積み重ねているのに比べると、日本語歴史比較言語学は依然として不足が目につく。本研究は、学界のこうした現状を改善することも目指した。

3．研究の方法

学生アルバイト 3 名に日本語音韻論を教授したのち、彼女らと協力して、連声資料収集とそのデータベース化とを進めた。データベース化にあたっては、表層形、基底形、構成要素、音韻的・形態的条件などを示した。これらの情報は、データベースの検索や日本語学習者の自発的学習に貢献するものであると同時に、どのような音素がどのような環境で連声するかを解明する上で欠かせないものでもある。

4．研究成果

下記研究論文のほか、現代日本語諸変種に頻出する音便とその生起条件とを整理したデータベース（以下「音便 DB」）を作成した。この音便 DB は、アニメや映画をきっかけに日本語学習を始める学習者の使用も想定している。「すげー（←凄い）」「くっから（←来るから）」のような音便は、非規範的な日本語とされ、従来の日本語教育ではあまり扱われることがなかった。そのため、学習者がこのような音便を含む台詞を理解しようとしても、自分自身で調べる手立てがない。そこで、音便 DB は、一般的な国語辞典に拠れば、検索語の構成要素を掴みうる構成とした。将来的には、学習者が web 上で気軽に検索できる形式での公開を目指している。

更に、この仕事の過程で浮き彫りと成った音韻論上の問題は、研究論文や国内外の学会・研究会において取り上げ、解決策を世に示した。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

池谷 知子・黒木 邦彦・田附 敏尚、日本語学習者のための「日本語音便データベース」の作成、Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin、査読有、Vol. 22、2019 年、25-32

KUROKI Kunihiro、Correlation between voicing and nasalization of Japanese obstruents、Technical and applied linguistics at Kobe Shoin、査読有、Vol. 20、2017 年、61-68

〔学会発表〕(計3件)

IKEYA Tomoko, KUROKI Kunihiro, and TATSUKI Toshihisa、Making of "The Japanese Sandhi Database" for Japanese learners、Venezia International Conference on Japanese Language Education 2018、2018 年

KUROKI Kunihiro、Positional Restrictions on the Non-nasal Coda Phoneme Q in Japanese、European Association for Japanese Studies 2017、2017 年

KUROKI Kunihiro、Correlation between voicing and nasalization of Japanese obstruents、International Conference on Asian Linguistics 2016、2016 年

〔図書〕(計1件)

岡崎 友子、衣畑 智秀、藤本 真理子、森 勇太、高田 祥司、竹内 史郎、黒木 邦彦 (ほか)、くろしお出版、バリエーションの中の日本語史、2018 年、304 頁 (45-67 頁)

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：田附 敏尚

ローマ字氏名：TATSUKI Toshihisa

所属研究機関名：神戸松蔭女子学院大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号 (8 桁) : 90645813

研究分担者氏名：白石 知子 (池谷 知子)

ローマ字氏名：SHIRAISHI Tomoko (IKEYA Tomoko)

所属研究機関名：神戸松蔭女子学院大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号 (8 桁) : 40581228

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。